

## 「私たちの起源」

ルカの福音書 3 : 23 - 38

December.25.2022

### ルカの福音書 3 : 23 - 38

#### Preface

ひと月ほど前に、今読みました聖書箇所を一人で読んでいますと、静かだけれども確固たる感動のようなものが、体の真ん中から体中に広がっていくような感じを覚えました。

特に、どの聖書箇所に感動を覚えたかと言いますと、38節の「そして、神に至る」という言葉に感動を覚えました。

イエス様の系図と言いますと、先週ヒムチアン先生が説教して下さったマタイの福音書の系図が有名ですが、実は今読みましたように、ルカの福音書にもイエス様の系図があるんです。

マタイの福音書の系図は、新約聖書の始まりの始まりにドカッと堂々と鎮座していますので、とても目立ち、またクリスマスの聖書箇所を見ようとしますと、嫌でも目に入ってきますので、少なくともほぼ必ずと言っていいほど、最低1年に1回は目にすると思います。

でも、ルカの福音書の系図は、ちょっと目立たないところにあります。

一番イエス様の誕生について詳しく書いているルカの福音書ですが、そのイエス様の誕生についての記述からも少し離れたところにありますし、マタイ、マルコ、ルカと、新約聖書の始めから3つ目の福音書に、特段特別な説明もなく、ただ人の名前だけを羅列しながらそっと静かに記録されています。

私自身も、マタイの福音書の系図については、これまで色々と考えて来ましたが、このルカの福音書の系図については、申し訳ない程に、これと言って時間を取って深く考えたことはなかったように思います。

ところがひと月ほど前、主イエス様の御降誕のことを考えながら聖書を読んでいますと突然、ここの系図が目から入って来て、心に迫って参りました。

特に38節の「そして、神に至る」という言葉が、迫って参りました。

瞬間、「ああ、人は、神に至る存在なんだ。すべての人は、本来神に至るということをイエス様は、ご自分の誕生をもってお示しになったんだ」ということが、パズルのピースが合わさって一つの物凄い絵が現れたかのように、一瞬にして感動が頭の中を巡りました。

26年前私がイエス様を信じた時、「ああ、イエス・キリストに捉えられ、まことの神を知るということは、何か特定の宗教を信じるということではなく、人が人として当然知っておかなければならない事実を知ることなんだ」と思ったあの時の感動が、今一度、この系図の御言葉を通して心の内を駆け巡りました。

### Part One

この系図を記した使徒パウロの弟子で、また頭脳明晰な医者であったルカが、この系図を通して伝えたいことは、大きく分けて二つあると思います。

一つは、イエス・キリストは人としてお生まれなされたけれども、実は神なるお方であられるんだということです。

この系図が、23節の「イエスは」という言葉から始まり、38節の「そして神に至る」という言葉で閉じていることから、イエスは神であられるということ、ルカは伝えたいんだということが見えてきます。

そして、もう一つの伝えたいことは、すべての人は本来、神に至る存在であるということです。

「イエスは」という言葉から始まり、「神に至る」という言葉で終える間に、たくさん具体的な人の名前が出てきます。

これらの実存した人々の名前を一つ一つ、「イエス」と「神」という言葉の間に置くことによって、人はイエス・キリストに繋がって然るべき存在であり、また本来、人は神に繋がっている者だということをルカは示したかったわけです。

中でも、36節を見ますと「ノア」という名前が出てきますが、創世記9：19を見ますと、「この人から全世界の民が分かれ出た」と書いてあります。

マタイの福音書の系図には「ノア」という名前は出て来ません。

ところが、このルカの福音書の系図には、全世界の民の祖先にあたるノアの名前が登場してきます。

ではルカは、「ノア」という名前をこの系図に入れることによって、何を伝えたいのか？

それは、「人は皆元々一つであり、また何よりも唯一の同じ神に至る存在なんだということを忘れてしまった世界に私たちは生きている」という重大な過ちについて伝えたいんだと思うわけです。

人は本来出所は一つで、その出所、起源こそ神であられる。

人は元々、神に至り、神に繋がり、神と一体となって、神と共に生きる存在であるんだということを伝えたい。

だからと言って、人が作り出したどんな神でも、八百万の神々と言われる神もどき、神ぶった偽物の偶像や人のようなものではないということ、静かに

淡々と系図をもって語るんです。

人が、イエス・キリストに繋がることは神に繋がることであり、また人が、神に繋がるためにはイエス・キリストに繋がらなければならない。

「人は本来、目に見えない神のかたちなるひとり子イエス・キリストを人として生まれるようになさった、イエス・キリストを通してのみ知ることの出来る唯一無二のまことの父なる神と共に生きる存在なんだ」ということが事実であるがために、派手な言葉を持って飾る必要もなく、カッコいい言葉を並び立てる必要もなく、あまりにも淡々と、潔い程に、事実を事実としてストレートに系図をもって語っていきます。

私たちも経験しますが、嘘をついていたり、何か後ろめたいと言いましょうか、本当のところを見せたくないと思っている時に限って言葉数が多くなりますが、ルカの記した系図は、事実を事実として語るだけなので、何の装飾もしていない潔さと爽やかさ、何よりも正直さを感じます。

この静かだけれども、あまりにも潔い語り掛けに、私は感動を覚えました。

私の心が感動できるように、私の内に住んでいて下さる聖霊なる神様が感動を与えて下さっただろうことにも感動いたしました。

## Part Two

マタイの福音書とルカの福音書には、同じ「福音書」という題が付けられていますので、当然この二つの福音書には共通点があります。

それは、両方ともイエス様がどんなお方で、何を成されたのかについて記録しているということです。

ですが、この二つの福音書には大きな相違点、違いがあります。

それは、読者が違うということです。

マタイの福音書は元々、旧約聖書というバックグラウンドを持ち合わせていたイスラエル人ユダヤ人を対象に書かれました。

なので、マタイの福音書の系図は、イスラエル民族に対する“神様の約束の成就”分かるような形で書かれています。

その系図の始まりは、先週のメッセージで見ましたように、イスラエル民族の大切な祖先にあたるアブラハムやダビデから始めて、その血筋からお生まれになった主イエスという形で系図を展開していきます。

川に例えますと、上流から下流に水が流れるように系図を書いていきました。

一方、ルカの福音書の系図は、川に例えますと、下流から上流へと遡るような形で書きます。

実際にルカ 3 : 23 を見ますと、

## ルカの福音書 3 : 23 (パワポ)

と書いています。

では、なぜ遡らなければならなかったのか？

それは、ルカの福音書が、聖書的文化を背景にしているイスラエル人ではなく、私たちのように、聖書を文化的背景としないイスラエル人ではないすべての人々、つまり、異邦人を対象に書かれた物だからです。

聖書を背景にした文化に育っていない人々に、聖書の書かれている神の約束の成就を語ったところで、何のことなのか理解してもらえません。

私たちもクリスチャンとなって聖書の内容について分かってきますと、徐々にマタイの福音書の系図が見えるようになってきますが、初めてマタイの福音書の系図を見ても「何のことだか分からない」というような経験を私たち皆したことがあると思います。

そんな異邦人たちに伝える系図は、約束の成就という形ではなく、遡らなければなりません。

つまり、人間誰しもが持っている“自らの存在の起源”という人類共通の最大の疑問、この疑問を解くために見つけ出すために世界が回っていると言っても過言ではないくらいの問いに答える形で、ルカの福音書は、イエス・キリストの系図を記したんだということが見えてきます。

どんなにあがいても至ることの出来ない答えを失ってしまったこの世界に、起源を知ろうとあまりにも複雑なことを用いてとんでもなくややこしく、分かる人にしか分からない方法で、でも実のところ、分かるとは言うものの本当は分かっていない、分かっている風で分かっていないこの世界に、

人は本来、神に繋がる、神が起源なんだということを示すわけです。

これは世の常だと思いますが、真実はいつもシンプルです。

ルカは、この淡々とした名前の羅列に力強い真実を込めて、人は、糸の切れた凧のように自分の所在地を知らずに生きていること、すべての問題の根本は、イエス・キリストという道なるお方を通して神に至るということを知らずに生きていることだということを知ろうとしているわけです。

### Part Three

ただここで、深刻な問題がのさばっています。

罪です。

どんなに事実を語ったところで、その事実を事実をして受けとめることが出来なくなるようにしてしまった罪が、私たちの中にあり、私たちの外にあり、私

たちの世界にあります。

犯す罪、存在としての罪、また向いている方向が間違っているという罪が、私たちの内にも外にもものさばっているがために、事実が事実として、生まれながらの人間には受け止めることが出来なくなってしまいました。

### コリント人への手紙第一 2 : 14 (パウロ)

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することが出来ないのです。

生まれながらの人間は、理解することが出来ません。

神に属するという事実を事実として受け止め、理解することが出来なくなってしまうのが、私たち罪人です。

ですが、この受け入れられない、理解出来ないということを打ち破るために、主イエス様は来てくださいました。

私たちが事実を事実として受け止めることが出来なくなってしまう最大最悪の根本原因である罪を清算し、解決し、打ち破るために、主イエス様は来てくださいました。

### マタイの福音書 1 : 20 - 21 (パウロ)

主イエス様が来てくださった理由は、元々そうであったご自分の民をその罪からお救いになるためです。

言葉を変えますと、神と一体となることが出来ず、神に繋がることを忘れ、神に至る存在なんだという自らの起源について認めることが出来なくなってしまう神との隔たりを修復し、回復させ、本来ある人間らしさを私たち人間に取り戻させるために、主イエス様は来てくださいました。

罪とは、神に繋がることを拒み、知らず、受け入れられないことであり、考えや行動で犯す罪は症状です。

考えや行動で犯す罪があるから罪人なのではなくて、考えや行動で罪を犯さずにはられない神と繋がっていないことが罪の根本です。

神と繋がっていない罪ゆえに出て来てしまう症状が、考えや行動で起こす罪ですね。

そのために、主イエス様は、すべての無知を、知らない知ろうとしない私たちの罪を清算するために十字架に架かれ、十字架に架かるためにお生まれ下さいました。

主イエスに出会い信じるということは、まだ途上にある今の私たちには知り

得ませんが、本来ある人間らしさを、神のかたちに造られた本来の人間らしさを回復させて頂くことです。

主イエス様に出会わせて頂いた者たちは、やがてキリストの再臨の時、イエス・キリストの栄光の体に造りかえられることをもって、本来の人間らしい人間へと変えられます。

そして、今のこの人生は、その人間らしさを前味として少しかも知れないけれども味わわせて頂き、また少しづつキリストの身丈にまで変えられている過程です。

ルカは、この神に至るといふ私たちの起源について、至ってシンプルだけれども、重い重い真理真実を込めた系図を書き残してくれました。

#### Part Four

人は、主なる神、御子なるイエス、御霊なる神の三位一体の神を自らの起源だと認めることが出来るようになると、安心を得ますね。

誰も、どんなことも、どんなものも、どんな教えも与えることの出来ない安心を得ます。

そして、究極行き着くところ、喜んで神のために死ぬようになります。

「わたしのためにののしられ、迫害に会い、ありもしないことで悪行を浴びせられても、あなたがたは幸いです」というイエス様の言葉が、その通りだと思える喜びが私たちの内に芽生えます。

なぜ使徒ペテロが、「イエス様と同じように真つすぐに十字架に架けられて処刑されるのは申し訳ない」と、逆さ十字架に架けられて死ぬるほどに、神のために死ぬる幸いを実感出来たのか？

それは、自らの起源を知っているからです。

自分が誰に属し、誰に至り、究極的にどこへ行くのかを知っているがために、人にとって最大の恐れであったはずの死が、もうそれ以上、安心平安を奪う要因ではなくなってしまうんです。

私たち結局、何を恐れながら生きているのかと言いますと、所在が分からないということですね。

所在が分からないから怖い、所有しても怖い、人から認められても怖い。

尽きることのない承認欲求が、留まることを知らないかのように溢れ出てきます。

「何で私のやっていることを理解してくれないのか！」、「私の存在を、痛みを、苦勞を認めてくれないのか！」。

怒って、裁いて、競争して、差別して、争って、合格不合格、賞を与えたり与えられたり、付いたり離れたりしながら、誰かに認めてもらうことに依存しながら

ら、恐れを動機にしながら生きてしまう。

もちろん、私たちは誰も一人では生きられない者として神様は造って下さいましたので、互いに認め合い、互いに愛し合いながら生きることは無くてはならないことですし、必ず必要なことです。

しかし、自分が根本的にどこに、誰に属しているのかが分からない、もしくは、日々、神の言葉である聖書の言葉と祈りと礼拝をもって主なるイエス・キリストを礼拝し、そこから神のみこころを求める生き方なしでは、

私たち人間、承認欲求に依存し、翻弄され、人を理解し愛す代わりに、人を裁き、人を道具として、人に依存しながら、結局、恐れに絡み取られていってしまいます。

私が初めてイエス様に出会い信じた時、「もうこれ以上、僕を誰かに、世に認めさせる生き方はしなくていいんだ!」、認めさせる生き方からの救いを、引き上げを、こう心の奥まったところと言いましょか、内なる霊で感じたように思います。

頑張って世の光になったり、地の塩になるのではなく、神に至る存在としてもう既に世の光で、地の塩なんだという神様の心に気付かされました。

そして周りの人に、一人でも多くの人たちに、「あなたも、あなたも、あなたも、もう既に神にとって世の光であり、地の塩なんだということを伝えたい。あなたの存在が、世に光をもたらしているんだという神の心を知っていただきたい、そのために主イエス様のことを知っていただきたい」と願って、今に至っております。

### Conclusion

悪魔やサタンは、私たちの人格をねじ曲げ、時には踏みにじり、認められ認めさせなければ駄目だと競争させ、互いに争わせ、傷つけ、人格・肉体・精神、そして霊を互いに攻撃し合わせながら、いつの間にか私たちを滅びへと向かわせようとする輩です。

ちょっとしたことでも、何とか関係を引き裂こうと、吠えたける獅子のように誰かを食い尽くそうと探し回っています。

この輩から引き出してくださるわざの始まりが、主イエス・キリストの誕生であり、主イエスの救いです。

救いとは、人は神に至る存在なんだということを知り、神のみこころを求めながら生きることです。

このクリスマスの時、今一度、主イエスのこの救いを覚え、また、承認欲求のために生きるのではなく、神のみこころを求める御言葉と祈りと礼拝をもって、

与えられた人生を生き抜くことを心に刻みたいと思います。

お祈りいたしましょう。

祝祷：さかのぼると、神に至る。